



大島康徳さん

1950年10月16日、大分県に生まれる。中津工業高校卒業後、1969年中日ドラゴンズに投手として入団。1988年日本ハムファイターズへ移籍。豪快にすくい上げるバッティングで本塁打を量産するスラッガーとして、中日・日ハム両球団の軸として活躍。1994年現役引退。2000年～2002年まで、日本ハムファイターズ監督を務める。現在は野球解説者のかたわら、野球を通じた社会活動を行っている。日本プロ野球名球会会員。マスターズリーグ：名古屋エイティディーズ所属。

大島康徳さん公式サイト <http://www.ohshima-yasunori.com>

阿佐ヶ谷、ホッとするよ

阿佐ヶ谷は女房が生まれ育った土地なんですね。

中日（名古屋）から日本ハム（東京）にトレードで来て、まず田園調布に1年半、それから世田谷に4年ですね。

その後阿佐ヶ谷にきて、もう17年になるのかな。

まだ阿佐ヶ谷歴は浅いんだけど、それでも阿佐ヶ谷駅に降りたらホッとするというのがあります。この降りたらホッとする、というのは、関門海峡を越えて僕の故郷の九州に入ったとたんにホッとするという気持ちと似たようなものですね。なんだろう、空気のかな。だからけっこう気に入ってる空気なんでしょうね。



けやき通りがいいね

夜でも物騒な事件に遭遇することもなし、春になれば善福寺川まで自転車飛ばせば、きれいな桜も見られるしね。

でも阿佐ヶ谷の何がいったいいたら、やはり、けやき通り（中杉通り）。ここを通った人はまず「なんと

素晴らしいけやき並木だろう！」って思うはずでしょうね。僕自身そうでしたから。杉並区に引っ越してきて子どもたちが、すごく感動したんです。「まるで木のトンネルだね！」（当時けやき並木はまだ背が低く、木がうっそうとしていた『となりのトトロ』の木のトンネルを連想させた）って。今では、愛犬の「まつり」を連れて、この通りを毎日散歩するのが、とっても心休まる一時なんです。だから、この阿佐ヶ谷の美しい景観を活かしながら、この街が発展していったら、とても嬉しいなと思います

ね。

ちょっと落ち着いた感じのこの街の雰囲気や住んでいる人たち、色々ひっくるめて、とっても気に入っているんです、阿佐ヶ谷を。



意外に遅かった野球との出会い

現在の仕事でみなさんのお目にかかるのは、テレビのスポーツ解説（NHKおはよう日本）がおもですが実は中学まではバレーボールに夢中でしてね、野球は高校からなんです。

ある日突然野球部の監督

が、僕に皮のいいグローブをくれたんですね。スパイクも一緒に。何となくその道具が、その皮の匂いが気に入って、手にとっているうち野球部に入っていたんですよ。それが野球との出会いです。

進路を考える頃、勉強はイヤだし、就職しようとして何社か受けたら全て合格したんですが、そこへプロ野球の話が飛び込んできたんです。まさか自分がプロになんて思っていなかったものだから、ちょっとすったもんだしたけれど結局「プロ野球へ行く」と決めて、1人だけで名古屋へ行きましたね。

僕の場合、高校で野球を始めたんで、プロ入りするまで3年間しかやってないんです。だから野球の奥深いところや、プロ野球の仕組みも全く解らない。それでも当時のスカウトや二軍の監督が「大島の魅力は長打力だから、打力を活かす」という方向で育ててくれたんです。逆に

野球一筋でなかったから、ずっとその世界の指導がしみこんで、良かったのかもしれないね。

野球は好きです、僕にはそれしかないから

ところが、野球が職業になると楽しくないですよ。プロ野球の26年、楽しかったことなど一度も無いですよ。レギュラーになるのも、試合に出るのも大変だし、人の三倍、四倍練習したって追いつかないですから、苦しいことばかりです。ただ自分の子どもには言いますよ「楽しみなさい」と。でも、楽しむためには、どこかで泣きなさいとも言いますね。どこかで泣く部分がないと楽しめないし、いくら泣いても試合に出れなきゃ楽しめないし、試合に出ても成績が残せなければ楽しめない。その繰り返しです。



最近では日本の野球やメジャーも見てますけど、プロとしての究極の技術を超えることができた時は楽しいでしょうけど、またその上が出てくるから、それを超えていけなくちゃならない。そこまでの域にきた人間が勝負に勝った時「ヨッシャ！」

という喜び、アドレナリンがグーッと出るところに楽しさがあるんだけど、その楽しさも一瞬で、ついにユニフォームを脱ぐ時「俺の人生よかったな、野球は楽しかったな」そして『野球を楽しめた』んじゃないかなと、大島個人は思うね。

僕は幸いなことに、監督も経験させてもらいました。監督は選手よりも、もっと苦しいですよ。これは自分で野球やってる方が楽ですね。組織の中に入って組織をまとめようとすると、こんな大変なものはありません。監督には監督の苦勞があるんです。

だけど野球は好きです、僕にはそれしかないから。

阿佐ヶ谷に引っ越してきたころは、近くの小学校で子どもたちが野球をしているのを見かけて、「あ、あれだと故障しちゃうかな、心配だな」なんて、声をかけたこともあるんですよ。

現在は名球会で出向く子どもの野球教室なんかで子どもた



ちに「こうなんだよ、あななんだよ」と教えるのは、とても楽しいですよ。やっと純粋に野球を楽しめる、、それが今なんだなって。

取材を終えて

今回のインタビューでは、阿佐谷や野球の話しにとどまらず、「杉並区」という行政への関心も感じられる防災や街の景観など幅広く大島康徳さんの関心事をお聞きした。また九州、名古屋、東京と色々な土地で生活された大島さんの話は、無国籍料理を思わせるどこか懐かしい大人の口調で、頼れる大黒柱といった印象だ。生活者としても、素晴らしい区民目線をお持ちだ。今度街でお見かけしたら気軽に「大島さん！」と声をかけてしまいそうだ。

—取材・執筆：高円寺かよこ、撮影：NPO 法人チューニング・フォー・ザ・フューチャー（取材・2009年9月21日 掲載・2009年11月5日）—